

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 5日現在

機関番号：13901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2008～2011

課題番号：20730424

研究課題名（和文）

軽度発達障害が疑われる子と親への早期介入プログラム構築のための研究

研究課題名（英文）Study for establishment of early intervention program for children suspected Developmental Disorders and their parents

研究代表者

永田 雅子 (Nagata Masako)

名古屋大学・発達心理精神科学教育研究センター・准教授

研究者番号：20467260

研究成果の概要（和文）：地域の育児支援の枠組みで実施できる自閉症スペクトラム障害が疑われる子どもと親への早期介入プログラムの開発を行った。本研究は、知多市子育て支援センターと連携して実施し、育児支援の位置づけの中で可能な支援モデルの構築をおこなった。2歳台の子どもと親を対象とした教室プログラムの効果を検討した結果、2クール継続して参加することで、①親の心理的プロセスは4段階を経て変化すること、②親の抑うつをやや低減させ、育児ストレスとくに母親の有能さのストレスを低減させること、③新版 K 式発達検査の結果、全領域および言語社会領域の発達指数が上昇し短期的な効果が認められること、④集団生活で必要とされる行動やスキルを獲得でき、母親も子どもに対する具体的な関わり方を身につけていること、⑤多くが保育園・幼稚園に就園し、年少で4割、年中でも6割の子どもたちが支援の二ードが低い状態であることが明らかになった。地域の育児支援の枠組みでおこなう教室のプログラムは、ニーズのある親子に支援の場を提供し、また効果が認められることが実証された。

研究成果の概要（英文）：We have developed an early intervention program for children with suspected Autistic Spectrum Disorders (ASD) and their parents. This program was designed to be implemented within the scheme of childcare support systems in the community. The study was conducted in cooperation with Child Rearing Main Support Center to establish a support model as one of the childcare support systems. The effects of this program including parents behavior were analyzed. Parents' continuous participation in the program over two cycles demonstrated the following effects: (1) the parents' mental state has changed through four stages; (2) the parents' depression levels were slightly reduced, and the parenting stress, especially the stress on mothers' competence for parenting was reduced; (3) the children showed increases of the developmental quotients in the total areas or the language - social area according to the Kyoto Scale of Psychological Development at the early stage; (4) the children learned actions and acquired skills necessary for the life in a group, while their mothers learned how to specifically communicate with their children; and (5) most of the children finally attended a nursery school or kindergarten, and 60 percent of the middle class children required less support. Such a program operated within the scheme of childcare support systems in the community can offer an opportunity to support children with ASD and their parents. The study has showed that our program was beneficial for both parents and children.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学, 教育心理学

キーワード：育児支援 / 発達支援 / 早期介入 / 発達障害

1. 研究開始当初の背景

本研究は、地域の母子保健事業の中で実施可能な、軽度発達障害児とその親に対する早期介入の療育プログラムの作成と、効果の検討を目的とするものである。発達障害のうち知的に明らかな遅れを伴わない自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorders:以下ASDと表記する）の子どもの場合、早期診断・早期介入が提唱されてきているにもかかわらず、乳幼児期早期からの療育的アプローチは確立されておらず、様子を見ましようという曖昧な対応をされていることが多かった（柳楽ら, 2004）。しかし、知的に明らかな遅れのない発達障害の場合でも、母子関係が悪循環に陥る可能性が高いこと（浅井ら, 2002; 金井ら, 2007）、また子どもの状態にあった対応がなされないまま幼児期を過ごすことが、その後の不適応につながる可能性が高いことが指摘されるようになってきており（浅井ら, 2007）、より早期からの支援体制の整備が求められるようになってきている。また、最近の報告では、広汎性発達障害の有病率は2%（鷲見ら, 2006）とされており、個別の治療的介入のアプローチだけでなく、地域の中でおこなうことのできるグループ療育のシステムを構築することが急務となっている。

2. 研究の目的

この研究は、全国に先駆けて実施を開始した発達障害の中でも知的に遅れが認められないASDを疑われる子どもと親への支援教室のプログラムを検討することを目的としている。グループのプログラム内容の検討をおこなうとともに、その効果を検討することで、発達障害、特にASDが疑われる子どもと親を対象としたより効果的な乳幼児期早期の支援プログラムを提唱していくことにある。そこで、親の精神的健康および子どもの発達の評価を教室参加前、参加後、保

育園・幼稚園に就園後まで長期的にフォローアップを行うとともに、教室参加時の母親の心理のプロセスや、短期的な効果を検討することで、教室の効果や果たしうる役割について検討を行った。

3. 研究の方法

1) 対象者および手続き

育児支援プログラムの内容について検討を行うとともに、教室に平成20年度第2クール目～平成22年度3クール目までの2年間に新規参加となった児の親53組を対象として教室効果の検討を行った。

教室参加対象児は、発達に大きな遅れがないものの、落ち着きのなさやコミュニケーションの取りにくさなどが認められ、ASDが疑われた児であり、1歳6カ月児健診や、地域の遊び広場等での相談から、教室の参加を勧奨され、つながってきている。調査に関しては、教室参加前のオリエンテーション時に教室担当者から文書にて調査の目的と内容、協力の任意性、結果の公開について明記したものを明示し、口頭で説明を行ったうえで、同意書に同意が得られた方のみを対象とした。また対照群として育児支援教室の行われている市で実施されている1歳半および3歳児健診を受診した子どもの親および子育て総合支援センターの教室やプレイルームに参加した子どもの親を対象に、研究協力者を募り、検討を行った。

2) 調査内容

母親の精神状態を図る尺度として日本版ベック抑うつ式自己評価尺度（Beck Depression Inventory-Second Edition;以下BDI-IIとする）21項目、母親の育児ストレスを図る尺度として日本版育児ストレス尺度（Parenting Stress Index;以下PSIとする）78項目を使用した。また、教室参加時に母親に独自に作成した「集団」「排泄」、

「食事」「遊び・かかわり」「母のかかわり（教室の中の課題）」の5領域から構成される生活・関わりチェック表を、1クール目開始時、1クール目終了時、2クール目終了時の3回、記入をしてもらった。また、各回ごとに設定された関わりの目標をもとにした感想用紙に毎回、感想を記入をもらった。

また、子どもにたいしては教室参加前後に、新版K式発達検査を実施し、発達の評価を行った。また教室終了後は、保育園・幼稚園就園以降、毎年秋に適応状況についてSDQ(Strengths and Difficulties Questionnaire)を使って、調査を行った。

4. 研究成果

1) 教室プログラムの構成

育児支援教室は、隔週午前中、8回1クルールのプログラムを設定し、毎回、関わりの目標を提示し、母親が子どもとかかわることを支え、スタッフが母親と子どもの反応を共有したり、各回の終了時に課題に関する感想の記述を求めたりするなど、親子双方へ介入を行う形で実施した。また原則2クール継続参加とし、同じプログラムを2回体験すること、また新規参加者と継続参加者が一緒にプログラムを体験することで、より効果を実感しやすいように工夫を行った。

教室参加者の特徴を検討するために、対照群との比較検討を行うとともに、2クール継続参加者を対象に、教室参加による効果を検討した。

2) 母親の抑うつと育児ストレス

ASDが疑われる乳幼児期の子どもを抱えた親は、同年代の子どもをもつ母親に比べて抑うつの陽性率が高く、育児ストレスも全般的に高いことが明らかになった。

ASDが疑われる児の14%の母親が抑うつ域にはいっており、これは一般群の母親と比べて有意に高い率を示していた（自由度1, χ^2 乗値 19.360）（図1）

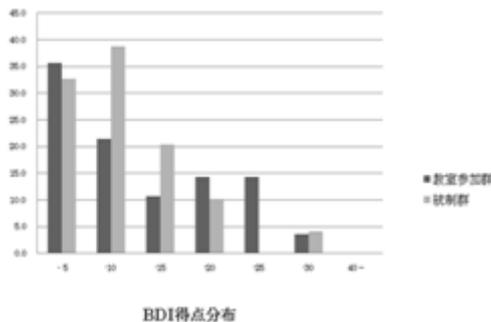


図1 BDI 得点の分布

また育児ストレスの検討では、PSI の”子どもの側面” ($p < .001$, t 値 6.77), ”親の側面” ($p < .001$, t 値 3.41), PSI 総点 ($p < .001$, t 値 4.98) すべてにおいて ASD 児群の母親のほうが高かった。とくに子どもとの間で”親を喜ばせる反応が少ない” ”期待通りにいかない” や、”親の有能さ” などの育児ストレスが有意に対照群より高かった。

2クール参加後は、BDI の平均値は参加前後で有意差が認められなかったが、重症度の人数の割合は、0.01%水準で有意に低下していた。

また育児ストレスでは、全ての下位尺度得点で、参加後群の育児ストレスの方が低く、”子どもの機嫌の悪さ” ($p < .001$, t 値 6.10), ”親としての有能さ” ($p < .001$, t 値 3.90) の尺度得点があり有意に低下していた。また総得点でも、”親の側面” ($p < .001$, t 値 3.41), PSI 総点 ($p < .001$, t 値 4.98) で教室参加群の方が育児ストレスが低下していた（図2）。

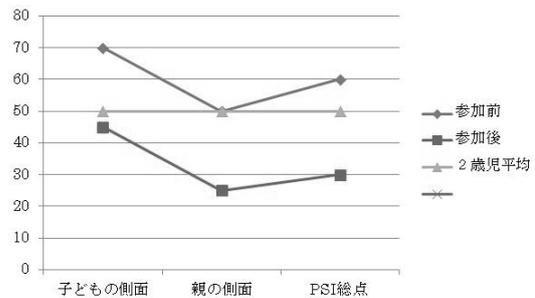


図2 育児ストレス尺度得点の参加前後の比較

2) 母親からみた子どもの成長と意識の変化

生活・かかわりチェック表の検討では、2クルールの継続的な参加を通して子どもが集団生活で必要とされる行動やスキルを獲得できていること、また、母親も、子どもに対する具体的なかかわり方を身につけていることが確認された。これらの多くは1クルールの参加によって効果がみられたが、母親が子どもの特徴について理解を深め、わが子の特徴に応じた必要なかかわり方を身につけていくためには2クール参加することでより効果がみられることが示唆された。

3) 母親の心理的プロセスの検討

母親の感想の記述を、KJ法を参考に、カード化し、継続的な経過を分析した。その結果、母親は教室参加を通して、母親は我が子のできなさへの着目が多い段階からⅠ期 “できない” 我が子へ闇雲に対応する時期、Ⅱ期 我が子の成長に気づき、意欲的に関わり方を工夫する時期、Ⅲ期 工夫しても

うまくいかないときがある我が子の姿に、不安になる時期、IV期 親なりに我が子に合った関わり方の手応えをつかみ、前向きに育児に取り組んでいこうとする時期という心理的プロセスを経て、ありのままの我が子の姿を受け止め、我が子に合った関わり方を工夫して今後も育児をしていこうとする段階に到ることが明らかになった。

5) 新版 K 式発達検査結果の比較

新版 K 式発達検査における検討では、認知—適応 ($t(51)=4.75, p<.001$)、言語—社会領域 ($t(51)=4.80, p<.001$) で、定型発達児よりも低い発達検査結果を示し、人の表情を区別することや、図形の概念の理解が苦手であることが示唆された。教室参加後は、全領域 ($t(30)=2.45, p<.05$) と言語社会領域 ($t(30)=2.89, p<.01$) の発達指数が上昇していた(図3)

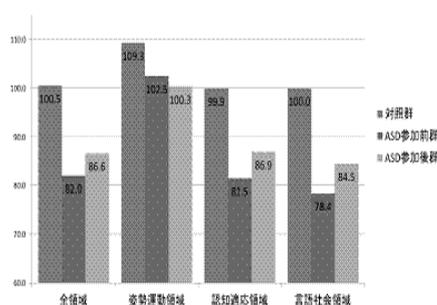


図3 各領域の発達指数の比較

6) 就園後の適応状況

就園後の適応状況を検討するため、年少および年中の秋に、園の担任と一緒に確認してもらう状況調査表とともに、SDQ (Strengths and Difficulties Questionnaire) の記入を依頼した。年少22名、年中12名から回答を得、年少では41%、年中では59%が、支援の二ードが低かった。各領域別の検討では、「行為」「多動」「仲間関係」領域では、年少・年中ともに半数以上が Need 群に属していたが、「情緒」に関してはNeed群は3割程度であった。

7) 総合考察

ASD が疑われる児とその親に対する早期支援は、まずは、障害の特徴等を理解することを主たる目的とするよりも、子どもの全体像を安定的にとらえ、理解できるよう支援することが重要な目的の一つとなると考えられる。発達障害の子どもたちの場合、早期に援助をおこなったからといって、個々の持っている特徴は、なくなるものではない。しかし、その子どもにあった対応を早期からおこない、親が子どもの特徴を

理解することは、子ども自身が社会・集団のなかで適応できる力を身につけていくことが可能とし、また親が自信を持って育児に取り組めるようになることにつながっていくと考えられる。

教室のプログラムは、親が感じる子どもの姿を確認し、共有し、子どもの反応や行動の意味を通訳して伝えながら、親の思いを受け止めていくこと、子どもにとってわかりやすいかかわり方、伝え方を(ご両親にしてもらう)ことで子ども自身の発達を促していくこと、目の前で起こってくる親と子どもとのかかわりをしっかりと支えていくことの3つの視点をもって構成されている。この視点は、子どもの年齢が低ければ低いほど不可欠なものであり、この教室のプログラムは一定の効果があることが確かめられた。研究期間中の保育園・幼稚園入園児の4.7%がこの教室の修了生であり、地域の育児支援の枠組みでおこなうこの教室のプログラムは、ニーズのある親子に支援の場を提供し、また効果が認められることが実証された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

- ①永田雅子、子育て支援の延長にある家族支援、発達障害医学の進歩、査読無、24巻、診断と治療社、7-13、2012
- ②永田雅子、周産期と発達支援の場からみえてくるもの—親と子の関係性を支援する、乳幼児医学・心理学研究、査読無、20(1)、5-12、2011
- ③永田雅子、岡嶋美奈子、地域における広汎性発達障害児と親への早期介入の試み—親の育児支援における効果の検討—、小児精神と神経、査読有、48(2)、143-149、2008

〔学会発表〕(計8件)

- ①佐野さやか、石井朋子、永田雅子、ASD児における早期支援教室参加前後の発達検査結果の比較—新版 K 式発達検査 2001 による発達指数および項目通過率の検討—、日本心理臨床学会、2011.9.3、福岡国際センター
- ②永田雅子、周産期医療と発達支援の場からみえてくるもの、第20回日本乳幼児医学心理学学会会長講演、2010.12.4、名古屋大学
- ③細溝さやか、石井朋子、永田雅子、かかわりにくい子を育てる親への育児支援教室の試み(1)—母親の心理過程の検討—、日本心理臨床学会、2010.9.4、東北大学
- ④永田雅子、細溝さやか、かかわりにくい・育てにくい子どもを育てる親への育児支援

教室の効果（１）、親の育児ストレスの検討
日本小児精神神経学会第 102 回大会、
2009. 10. 16、中電ホール

〔図書〕（計 2 件）

①永田雅子、育児不安・育児困難のアセスメント、松本真理子・金子一史編 子どもの臨床心理アセスメント、金剛出版、68-72、2010

②永田雅子、周産期から乳幼児期の親子関係への支援、本城秀次監修、子どもの発達と情緒の障害、岩崎学術出版、95-108、2009

6. 研究組織

(1) 研究代表者

永田雅子 (NAGATA MASAKO)

名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター・准教授

研究者番号：20467260

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし